

講演会

中越国境一帯の言語と漢字

主催 科研費基盤研究 B「ベトナム東北部諸言語に見られる借用漢語音の研究」
(研究課題番号：17H04522 代表者：東京大学 吉川雅之)

講演者 李錦芳氏 (Professor Dr. Li Jinfang) 中央民族大学教授
デビッド・ホルム氏 (Professor Dr. David Holm) 国立政治大学教授

◆大阪開催

日時 2019 年 3 月 27 日(水) 13:00－17:30
会場 [大阪大学箕面キャンパス](#) B 棟 1 階プレゼンテーションルーム

◆東京開催

日時 2019 年 3 月 29 日(金) 13:00－17:30
会場 [東京大学駒場 I キャンパス](#) 21KOMCEE East 2 階 K211

※講演内容は大阪開催と東京開催とで同一です。
※会場では中国語から日本語への通訳を行います。
※入場無料、事前申込不要です。

- 13:00- 導入：中国広西からベトナム東北部にかけての言語分布
吉川雅之（東京大学）
- 13:30- 講演 1 汉语借词在壮语和越南语中读音的差异
（チワン語とベトナム語における借用漢語音の違い）
李錦芳（中央民族大学）
- 15:30- 講演 2 Methods of Analysis for Vernacular Character Texts: Taking Complexity and Emergence into Account
デビッド・ホルム（国立政治大学）
- 17:10- 総括：中越国境地帯の言語研究（成果と展望） 清水政明（大阪大学）

開催の趣旨

中越国境一帯——中国西南部からベトナム東北部にかけて——は多くの民族が居住し、地区によっては言語分布がモザイク状を呈する地域です。本科研費共同研究では、ベトナム東北部の言語の語彙に含まれる漢語由来の形態素の音価について、通時的視点に立った形成過程の解明を目指していますが、研究期間 2 年目の活動の一環として、国境の中国側に居住するチワン族（壮族）の言語や文字を専門とする研究者をお招きし、漢語由来の借用語や、宗教職能者が使用している漢字系文字に焦点を当てた講演を行っていただきます。日本ではあまり知られていない、チワン族と漢語・漢字との関係が明らかにされます。

汉语借词在壮语和越南语中读音的差异

李锦芳
中央民族大学

壮语和越南语是受汉语影响持续最久、程度最深的汉语分布地区南面语言。其所受影响比其他中国少数民族语言和泰语、老挝语更明显。共同的表现形式是吸收了大量汉语借词，并利用汉借词造词，还形成了汉壮语（用汉字古音阅读汉文献，仅流行于广西中南部部分壮族地区，本文不讨论）-汉越语，都利用了汉字或者汉字部件创制了壮字和喃字并留下大量文献。

壮语和越南语的汉语借词少量对应汉语上古音，但是主要的部分对应汉语中古音，这部分借词壮语统称为“汉语老借词”（相对于近百年来从西南官话借入的“新借词”），越南语表现为“汉越音词”。

壮语和越南语都地处汉语分布区域南端，吸收了大量汉借词，语音系统主要对应于汉语中古音，壮语老借词语音系统和汉越音比较接近，但也存在明显的区别。本文讨论双方的差异。

声母部分突出的差别是汉语擦音、塞擦音壮语读擦音，而汉越音塞化：心母等擦音声母字壮语读擦音 θ/λ ，而汉越音表现为塞音 t ；精组字壮语读擦音 c 或 θ/λ ，而汉越音表现为塞音 t 、 t^h 。此外，帮、端母字壮语仍读为清塞音 p 、 t ，汉越音则浊化为内爆音 b 、 d 。

韵母部分差异不是很突出。遇合三鱼韵字如驴、许、初、女、箸、书、锯、余、墟壮语读 $u/au/o$ ，汉越音读 u ；蟹开四齐韵如蹄、帝、第、齐、礼，壮语读 ai （第 aai ），而汉越音读 e ；梗摄字韵尾壮语读舌根鼻韵尾 $-ŋ$ ，汉越音则读舌面鼻韵尾 $-ɲ$ 。

声调方面壮语和汉越音都是四声八调分化，与汉语声调对应，但是汉越音平弦问跌锐重六调与汉语声调的对应不如壮语整齐。

问题讨论：

1. 壮语中的汉语老借词语音系统和汉越音的来源是唐代长安音还是邻近汉语古代方言。
2. 汉越音声母与汉语中古音系统的主要差异是借音源头造成还是自身因素，抑或区域语言联盟。
3. 不同的社会历史背景如何影响双方的汉借词语音系统？

李錦芳

中央民族大学

チワン語（壮語）とベトナム語は、漢語の南に分布する、漢語からの影響を最も長く、最も深く受けた言語である。その影響は、中国における他の少数民族言語やタイ語、ラオス語よりも更に顕著である。共通する特徴として、両言語は漢語から大量の借用語を吸収し、そこからさらに語彙を創出し、漢壮語／漢越語というものを作り上げてきた（漢壮語は漢字文献を読むのに用いられる古漢語音で、広西中南部の一部の地域でのみ行われているが、今回は考察対象としない）。また、両言語はともに漢字やその文字要素を利用して壮字（伝統チワン文字）と字喃（チュノム）を創造し、それを用いた数多くの文献を残している。

チワン語とベトナム語の借用漢語は、発音面で上古音と対応するものも少数含まれるが、中古音と対応するものが主体であり、チワン語ではこの語種を「漢語からの旧借用語」と総称し（ここ百年間に西南官話から借用された「新借用語」と区別される）、ベトナム語では「漢越語」の名で呼ばれている。

チワン語の旧借用語の音韻体系は漢越音（漢越語の発音）と似ているが、明らかに違うところもある。今回は両者の相違点について論じる。

声母に見られる最も突出した違いは、漢語の摩擦音・破擦音がチワン語では摩擦音で発音されるのに対し、漢越音では破裂音化している点である。心母などの摩擦音はチワン語で摩擦音 θ で発音されるのに対し、漢越音では破裂音 t で実現する。精組字はチワン語で摩擦音 ϵ または θ で発音されるが、漢越音では破裂音 t 、 t^h で実現する。摩擦音・破擦音以外では、幫母字、端母字がチワン語では漢語と同じ無声破裂音 p 、 t で発音されるが、漢越音では有声化し、入破音 b 、 d で実現する。

一方、韻母の差異はさほど顕著ではない。「驢、許、初、女、箸、書、鋸、余、墟」といった遇撮合口三等魚韻字は、チワン語では $u/au/o$ で発音されるが、漢越音では u で実現する。「蹄、帝、第、齊、礼」といった蟹撮開口四等齊韻字は、チワン語では ai （「第」は aai ）で発音されるが、漢越音では e で実現する。梗撮字の韻尾は、チワン語では軟口蓋鼻音 $-ŋ$ で発音されるが、漢越音では硬口蓋鼻音 $-ɲ$ で実現する。

声調に関しては、チワン語と漢越音はいずれも四声八調に分かれ、漢語の声調体系と対応している。しかしながら、その対応関係の規則性という点では漢越音における $ngang$ 、 $huyền$ 、 $hỏi$ 、 $ngã$ 、 $sắc$ 、 $nặng$ の六声調は、チワン語に及ばない。

問題提起：

1. チワン語の旧借用語の音韻体系と漢越音の源は、唐代長安音なのか、それとも近隣の古代漢語の方言なのか。
2. 漢越音の声母が中古音の体系と異なっているのは、借用元に起因することなのか、それとも借用した側自身の要因もしくは借用した側の言語連合による変化の結果なのか。
3. 異なる社会的歴史的背景は、両言語の借用漢語音にどのような影響を与えたのか。

Methods of Analysis for Vernacular Character Texts: Taking Complexity and Emergence into Account

David Holm
NCCU, Taipei

Working together with Zhuang colleagues, David Holm has conducted a survey of the so-called Old Zhuang Script in 45 localities in Guangxi, Guizhou, eastern Yunnan, and northern Vietnam. Apart from various Zhuang subgroups, other Tai-speaking groups were also covered, including Bouyei, Maonam, Mulam, Sha, Nung, and Tay. Unlike previous studies, this survey was based on whole texts or substantial text segments, and took traditional recitation by local priests or song kings as the starting point. The resulting data provide us with a powerful base from which to investigate a range of historical, linguistic and ethnological problems, including patterns of migration, dialect mixing, and relative dating. They also allow us to make hypotheses about the likely origins of manuscripts from unknown locations.

This seminar will be practical in orientation, describing step by step and level by level the methods I use for the analysis of vernacular character manuscripts. Sub-topics will range from the details of graphic structure of individual glyphs, calligraphic style and stroke order; to methods of working with local informants and techniques of sound recording and interviewing; and on to transcription, word glossing, and annotation. Methods for determining the historical depth of various readings will also be discussed.

A key feature in this approach is that it leaves open the question of whether or not the Old Zhuang Script, or any other vernacular script, forms a “system”. Close attention to the social milieu in which knowledge of a particular script is transmitted often allows us to pinpoint innovations as well as continuities in graphic practice.